

THE ULiCS TIMES

うりくす・タイムズ

Vol. 1 Dec. 2017

2017年12月1日(金) 神戸大学附属図書館学生チームULiCS [季刊発行] <https://lib.kobe-u.ac.jp/about/ulics/>

The ULiCS Times創刊にあたって

ULiCS (うりくす) とは、「魅力的な図書館づくり」を目標として2015年に発足後、図書館職員と共に活動中の学生団体です。全国規模で行われる図書館イベントに参加したり、オープンキャンパスの図書館ツアーを運営したり、「古書めぐり」で京都を散策したり、その活動内容はさまざま。

この“The ULiCS Times”では、そういったULiCSの活動報告を中心に、図書館のお役立ち情報や、書評、図書館にまつわるエッセイなどをお伝えしていきます。ULiCSを通じて多くの人が図書館や本の魅力と出会っていただければ幸いです。

図書館総合展 学生協働サミット in 横浜



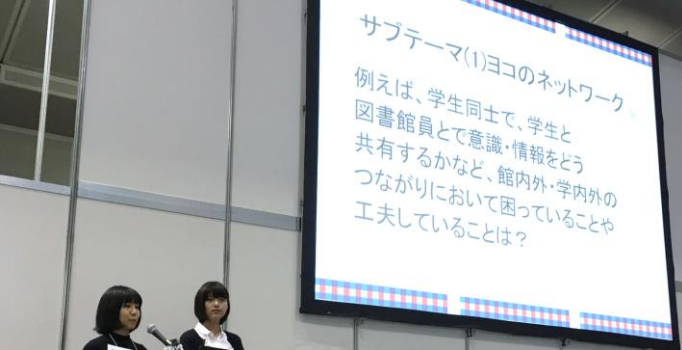
11月7日、私たちは神戸大学附属図書館サークルULiCSとしてパシフィコ横浜で開催された学生協働サミットに参加した。「図書館共同体におけるタテ・ヨコの繋がり」をテーマに全国から集まった学生たちが大学図書館について意見交換を行うという内容であった。

今回、ULiCSも図書館団体の一つとして活動紹介をしたのだが、他の団体の活動報告を聞いているとその活動の活発さと団体メンバーの向上心に幾度となく驚かされた。具体的な達成感を得るために数値を含む年度目標を立てている団体、学生が主

体で一年生へのレポートの書き方など定期的にイベントを開催している団体、一年次に図書業務の研修期間を設ける団体など、図書館を活性化するための工夫が至る所になされていた。

ULiCSは「ヨコの繋がり」をテーマに、キャンパスや各図書館の距離が離れているためメンバー同士のミーティングが難しいことを課題に挙げ、「Slack」というツールを使いながら学生、職員間での情報共有に努めていることを中心に話した。

(次頁へ)



発表中の西村と畠田

(前頁続き) たくさんの応援の声や"Slack" 導入検討など嬉しい意見があった一方で、顔を合わせる気がない人とはSNSを通じて話が進まないのではないか、ミーティングがあってこそこの活動だと思ふというふうに厳しい声も少なからずあった。

また、各団体、活動形態が様々で、ULiCSのように図書館サークルも多かったものの、学生をアルバイトやインターンの一種として図書館業務に充てている団体もあれば、図書館直属ではなくメンバーが授業の履修者から成り立っている団体もあった。アルバイトとなると社会勉強にはなるが、お金が発生すると同時に責任感や強制力が伴うのでは、といった意見もあったが私は団体の形態にはこだわらなくてもよいのではないかと思う。どのような形態であれ、最初は本が好きで良さを人に伝えたい、大好きな図書館を活性化させたいという人々が集まっているはずだ。そこに形態などは必要のないものを感じる。各大学、各団体が模索しながら独自のやりかたで活動していけばよいのではなかろうか。

私たち神戸大学附属図書館サークルULiCSはこの秋で発足3年目を迎える。サークル活動としてはまだまだ手探り状態だ。今回のサミットで他団体から刺激を受け、意見をもらい、ULiCSの現状を改めて見つめ直す良いきっかけとなったと思う。これを今後に生かし、神戸大学図書館を支える存在となれるように多くのことに挑戦していきたい。

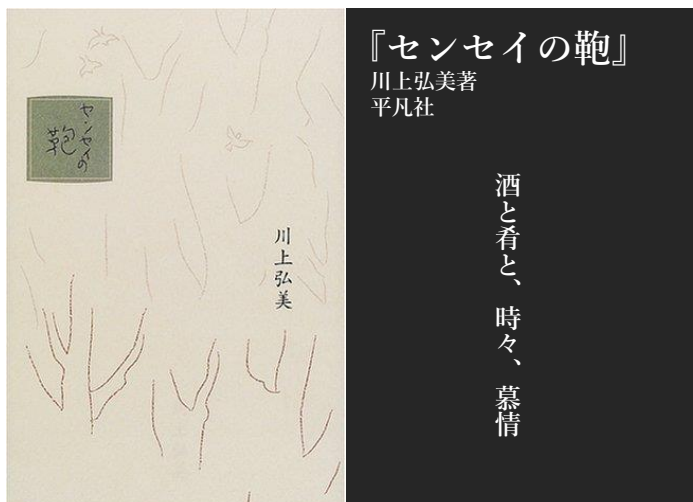
畠田 美宙 (文学部1年生)



ブース展示の様子



ツイッターで連載中の『うりこミ』をまとめた限定冊子。初日にすべてなくなったため増刷したが、そちらも即日なくなる人気ぶり。



塩らっきょう、きんぴら蓮根、まぐろ納豆。煮しめたこんにゃくにはとうがらしを利かせ、焼いたばかりの鮎にはたで酢を添える。

三十七歳の主人公・大町月子は、居酒屋のカウンター席で齢七十の恩師・センセイと偶然に再会し、肴の好みがよく似た二人は酒を酌み交わすようになる。あるときは採れたてのキノコを熱々のキノコ汁にして食し、またあるときは薄く切った湯をくぐらせボン酢に浸した蛸しゃぶに舌鼓を打つ。平凡社の単行本は落ち着いたシンプルな装丁がまたいいのだ。生色紙の和紙のような、厚みと温かみのある紙が優しく手になじむ。

これが酒飲みのためのグルメエッセイでなく、谷崎潤一郎賞を受賞した恋愛小説だと誰が思うだろうか。少なくとも最初にそうと知っていれば私は興味を示さなかったであろうが、このようにまんまと手に取り物語に絡めとられてしまった。

たまたま同席したときに飲んでた月子とセンセイは季節の移ろいを共に感じ、行動を共にすることが増え、仲違いや遠回りを経て近付いていき、そして――

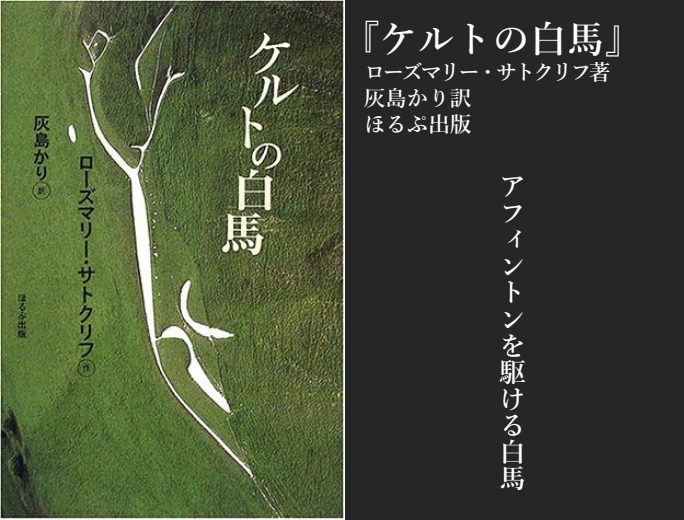
数々の受賞歴を持つ著者は幻想的な空気を描き出すことを得意とするが、本作でもその手腕は遺憾なく発揮されている。季節の境、時間の区切り、人との間に漂う空気。どこか曖昧で掴み取れないもののほど、しかし鮮やかに匂い立つ。二人それぞれに歩んできた経験や来し方は断片しか明かされず、それゆえにこちらの想像を掻き立てる。

過去から未来へと移ること、成熟して大人になること、人と人とが近付いていくこと。あらゆる流れは、まっすぐで不可逆で明瞭なものだと決まり切っているのではない。時に歯がゆくとも苛立たしくともそれを受け入れた先に、ある種の安らぎや美しさが見えることもあるかも知れない。こう語りかけられている気さえしてくる。

率直に言って歳の差恋愛である。誰もが祝福する想いがテーマではない。誰もが受け入れられる小説ではない。それでも、平易ながら奥行きのある文章、骨太のしっかりした構成、容易には先を読ませない展開、そして確かなメッセージを宿す作品である。

谷口 由佳 (職員)





広大な畑が左右にはてしなく広がる細い道を走る車の助手席に座っていると、白く柔らかな線で描かれた緑の丘を駆ける馬が現れた。

「あれは3、4千年前に人々が地上にchalkで描いた白馬なの。」隣で運転している英国人の親戚が言った。

私は大学の夏季プログラムで3週間、イギリスに短期留学に来ていた。週末は丸々自由時間が与えられていたため、イギリスに血の繋がらない親戚を持つ私は、幸運にも車でアフィントンに連れて行ってもらえたことができたのだ。綺麗に白馬が見えたのは行き帰りのほんの一瞬でしかなかったが丘を颯爽と駆ける白馬は私の目に焼き付いて離れなかった。

帰国後、母にその話をするところある本を本棚から取り出してくれた。それが『ケルトの白馬』である。私は表紙を見て、イギリスで見たのはこれだ！と思った。

作者のローズマリー・サトクリフはイギリスの多くの歴史小説を手掛けた女性作家である。私には幼い頃に彼女の作品を読んで、話の筋は面白いと思いながらも、時代背景がほとんど理解できなかったという経験がある。しかしながら、今回は、彼女はあの白馬からどんなインスピレーションを受け、どのような物語を生み出したのだろうと気になって仕方がなかった。

話はイギリス初期鉄器時代（紀元前1世紀ごろ）に遡る。ブリテン島のイーストアングリア地方には「イケニ人」と呼ばれる部族が住んでいた。イケニ族の族長の末息子、ルブリン・デュは先住民の暗い血が入っていることを示す、褐色の肌をしていた。5歳の時、彼は一生忘れることのない幻の雌白馬を夢に見る。さらにルブリンはしばしば誰にも理解されない過が織りなす模様を描いた。ルブリンが成人して2年経った年、イケニ族は強大なアトレバテース族に征服されてしまう。族長である父も兄2人も戦死し、突如族長としての重責を背負いながら捕虜となったしまったルブリンは、ひょんなことからアトレバテース族の丘砦の長から後世に伝わる白馬を描くように頼まれる。敵の命令にもかかわらず、一族を救うためルブリンは絵を描くことを決意する。

アフィントンの白馬は単なる権威の象徴ではない。力、美しさ、そして馬の神エポナの姿を秘めているルブリンの命を懸けた傑作なのである。

畠田 美宙（文学部1回生）



「あなたの思い出は本物か？」と聞かれたとき、あなたはどんな顔をするでしょう。あなたにとってそれは決して臆気な記憶ではなく、確かに経験したこととして記憶されているのに、それが友人や家族と記憶が食い違っていて、そして相手からそんな質問をされたとしたら……

この本では人間の持つ記憶が、それも偽の記憶が、どのようにつくられるかということについて、様々な実験の結果とともに紹介されています。本書で紹介される偽の記憶の構成方法には大きく分けて、第1章に示されるような記憶の改竄、第2章から5章までで取り上げられる偽の記憶の創出、そして第6章で述べられる記憶の美化の3種類があります。

第1章を読むと、事件や事故の目撃者どころか当事者である被害者の記憶でさえも実は確固たるものではないのだ、ということにあなたは驚くかも知れません。第2章では実際にはなかった記憶が徐々に”思い出される”過程について記されています。いずれも記憶の構成には第三者の質問などの働きかけが大きな役割を担っていることが分かります。

もしあなたに3歳以下の記憶や胎内にいたころの記憶があったり、過去に地球外生命体によって何かしらの施術をされた思い出があったりする場合には、第3章から5章の内容に反駁したくなるかも知れません。もちろん現在の科学には限界がありますから、全てが全て作られた記憶であると断言できるわけではありませんが、やはりここでも同様に第三者による働きかけが、記憶の構築に大きな影響を与えることが示されています。

第6章のみはやや特殊な趣を持っており、第三者の介入なくしても過去の記憶というものは新たに自分の都合の良ように美化されうる、ということが書かれています。

あなたの記憶は本当に過去にあったことなのでしょう？ 期せずして他人の記憶の改竄に手を貸してしまったことはないでしょうか？ さて、あなたのその思い出は、果たして本物でしょうか？

有馬 良一（職員）

LINE スタンプ 発売中



うりこ



快適図書館講座#1 アカウントサービスを使いこなそう

今年4月に大学院人文学研究科の研究生としてなんとかモグリこんだが、卒業生と正規の学生とは、図書館利用に大きな差があることに気がついた。WEB上でのサービス、中でもアカウントサービスがそれだ。もちろんオリエンテーションで、おおよその図書館の使い方の説明はなされているのだが、このアカウントサービスまで詳しくされていないように思う。



まず図書館のホームページからログインし、アカウントサービスを選択するとそこに様々なサービスがあることがわかる。「文献複写」「希望図書リクエスト」「利用状況の確認」などがそれだ。とくに私が気に入っているのは「デリバリーサービス」である。神戸大学は立地上各学部・大学院が分散しているため、付属する図書館が六甲台には5つも点在している。各図書館はそれぞれ特色ある蔵書を構成している。そのため通常使う図書館以外の図書館に目的の本がある場合が多々ある。その時その本の所在が分かれば、その図書館に取りに行かなくても取り寄せてくれるのである（むかし流行ったアニメ『魔女の宅急便』を思わせる）。

その他にも、検索して見つけた本に自分の「タグ」をつけることができるサービス、自分の研究分野の件名を登録しておく、その分野の新しい本が入った時、メールで知らせてくれる「新着図書アラート」などのサービス、そして気になる本にブックマークをつけることができるサービスがある（このサービスに気がつくまで、アマゾンの「ほしい物リスト」を利用していた）。

当初これらのサービスの使い方に手間取ったが、使い慣れてみると、これほど便利なものはない。ところで、これらの便利な図書館のサービスを他の学生の皆さんは使いこなしているのだろうか。もし知らなければ、論文作成・レポート作成に是非役立ててほしい。とくに働きながら学んでいる忙しい社会人学生の人たちに利用していただきたいサービスである。

紙谷 寛（人文学研究科研究生）



プラハ便り#1

先日、映画界でちょっとしたハブニングが起きた。エンストラポイド作戦というナチス幹部暗殺事件を元にした映画が立て続けに二本封切られたのである。一つは『ハイドリヒを撃て!「ナチの野獣」暗殺作戦』（チェコ・英・仏）で2016年夏に、もう一つは『HHhH』（仏）で2017年春に公開された。なぜこうしたネタ被りが起きたのか調べてみたものの、前者を製作したショーン・エリス監督は構想に15年を掛けていたそうなので単なる偶然のようである。とはいえ、チェコというあまり大きくない国で起きたこの事件に近年関心が集まっているのは紛れもない事実なので、まずは簡単にこの事件の概要を説明しよう。

第二次世界大戦当時、ナチス・ドイツ占領下にあったチェコを管理していたのは親衛隊でヒムラーに次ぐ男と言われていたラインハルト・ハイドリヒだった。彼は『金髪の野獣』『プラハの虐殺者』という異名を持つようになるほど厳しい占領政策を敷き、チェコ市民から恐れられていた。その金髪の野獣を殺害すべくチェコ亡命政府とイギリス軍が手を組み、暗殺訓練を受けたチェコ人空挺兵を空から送り込んだ。1942年5月、彼らはプラハ郊外でハイドリヒを襲撃し暗殺に成功するものの、最高幹部を殺害されたナチスの怒りは凄まじく、実行犯を匿ったという疑惑を掛けられたリディツェ村が「消滅」してしまうなど苛烈な報復行動を招いてしまう。プラハにも厳重な包囲網が敷かれたせいで実行メンバー7人も脱出できずに市内の教会に潜伏していたが、仲間の密告により包囲され、銃撃戦の末に全員が死亡した。



話を現在に戻すと、事件の舞台となった教会は、『HHhH』の同名原作小説が2010年にフランスの有名なゴンクール新人賞を受賞したのをきっかけに、隠れ観光スポットと化し外国人観光客も訪れるようになった。その教会、聖ツィリル・メトディ正教大聖堂はプラハ市内南部に位置する。カレル橋や旧市街広場を擁し観光客でごった返す一区とは違い周囲はオフィスが多く、地元の人らしき姿が大半である。とはいえ、市内の至る所を走っている路面電車を使えば旧市街からでも15分足らずで着く。入場料は無料で、暗殺時に使われたとされる装備などが展示されているだけではなく、実行メンバーが潜伏していた地下聖堂にも入ることができる。私が9月末の午後を訪れたときは、チェコ人高校生らしき団体の姿もあったが人はそれほど多くなくのんびり見て回ることができた。

ちなみにこの教会の名前である聖ツィリルと聖メトディは、聖書をスラヴ語に翻訳しキリスト教伝道に務めた聖人としてボヘミア史における重要人物であり、チェコの祝日名にもなっている。いつかプラハに行くことがあれば旧市街から少し足を伸ばして、チェコが歩んできた二つの歴史を味わえるこの教会を訪ねてみてはどうだろうか。

小林 史明（国際協力研究科M1）
※2017.12現在、チェコに留学中。